

都市近郊農山村における 高度経済成長期という経験

住民の就業履歴および
平仙レース社内報「むつみ」の分析を通して

Experience of the High-Economic-Growth Period in Suburban Rural Villages : Through an Analysis of Residents' Employment Histories and the Hirasen Lace House Journal "Mutsumi"

湯澤規子

YUZAWA Noriko

はじめに

- ① 入間織物生産地域におけるレース生産への展開
 - ② 平仙レース工場の周辺農山村への拡大とその影響
 - ③ 住民の就業履歴からみた高度経済成長期における農山村の変化
- むすびにかえて

【論文要旨】

埼玉県入間地域は、幕末から明治・大正期にかけて全国でも有数の綿織物生産地域へと成長した地域の一つである。この入間織物生産地域における有力な機業家であった平岡仙太郎家は、大正末期にレース工業に着目し、入間市仏子に平仙レース工場を設立した。平仙レース工場はとりわけ第二次世界大戦後、その生産量では日本有数の工場となり、昭和35(1960)年以降は事業の拡大に伴って、より周辺の農山村にも分工場を設立し、昭和60(1985)年まで操業を続けた。当該地域の少なからざる人々は、平仙レース工場およびその分工場が立地したことにより、農山村生活から工場生活、企業生活への変化を経験した。

本稿では、このような都市近郊農山村における人々の暮らしと地域の変化を、住民の経験や就業履歴に対する聞き取り調査、当時の記録としての社内報「むつみ」を通して明らかにすることを目的とした。その結果は以下のようにまとめられる。

入間織物生産地域およびその近隣・周辺地域において、平仙レース工場そのものは住民たちの高度経済成長期の経験と深く結びついていた。その経験とはすなわち、第一に機械を扱う工場勤務という経験である。これは近隣農山村から入社した女子従業員にとっても、分工場が立地した周辺農山村の人々にとっても共通する経験であった。第二にあげられるのは、寮生活を通して得た、新しい価値観の経験、新しいモノの経験である。農山村の暮らしとは全く異なる寮生活の中で、教養講座などを通じて新しい時代を実感した経験や、ミシンや水洗トイレ、レースとウェディングドレスに触れた経験は、中学校を卒業後にレース工場に勤め始めた女子従業員の当時の記録や聞き取り調査の中でとりわけ鮮明であった。第三にあげられるのは、農林業から製造業への転換という経験である。これは特に、分工場が立地した周辺農山村に暮らす人々が経験したものであり、彼らの就業履歴は衰退する林業とそれを代替する製造業の登場という地域の産業構造の変化と密接に関わっていた。

本稿ではさらに、これらの経験の意味と地域の変化を地域の人々の視点から検討するため、分工場が立地した名栗村に焦点をあて、聞き取り調査によって住民の就業履歴を検討した。事例とした各氏はいずれもその就業履歴の中で平仙レース工場と関わり、林業、農業、養蚕業からレース製造業へという地域全体の産業転換を具体的な就業の変化として経験した点で共通していた。しかし、彼らの経験を子細にみると、人々にとっての変化の諸相はそれほど単純ではなかった。農林業から工場勤務へと変化したことで、就業形態、賃金、生活サイクル、求められる技術が明確に変化した一方で、仕事に対する姿勢や意識、技術向上の努力などは異業種への転換の中にありながらも連続的に持ち続けられており、その連続性によって平仙レース工場が支えられていた。つまり、従来の地域や暮らしが新しい地域や暮らしへと変化する過程は、断絶性と連続性の両側面を含みつつ、その両者が相互に影響し合いながら進行するものであった。

【キーワード】 都市近郊農山村、高度経済成長期、就業履歴、林業、レース工業